九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『文子』研究序説 ： 『老子』引用をめぐって

有馬, 卓也
九州大学大学院

https://doi.org/10.15017/18085

出版情報：中国哲学論集. 10, pp.92-107, 1984-10-30. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

『文子』研究序説

―『老子』引用をめぐって―

有馬卓也

古来、古籍性の有無が主たる論議の中心として取り沙汰され、やや行き詰まりの様相を呈していた『文子』ではあったが、こと数年来、大陸の方では長沙馬王堆東漢墓帛書(1)、河北省定県西漢墓竹簡(2)などの資料に基づき、新しい『文子』研究が胎動し始めている。本稿では今後の『文子』研究のための基本的な文献学的・思想的問題について考証したい。

一　文献学的基本問題

『文子』の最も古い記録は『漢書』藝文志に見える「『文子』九篇 ― 老子の弟子。孔子と並時にして、周の平王問ふと稱すは依託に似たる者なり」という記述である。班固自註に依託とあるように、後漢期に於て已に著者不明の書だったようである。そのほか、

齊王、文子に問ひて曰く、「國を治むることいかん」と。對へて曰く、「夫れ賞罰の道たる、利器なり。君固く之を握れ。以て人に示すべからず。若如の臣は、猶は獣鹿のごときなり。唯だ薦草に而就く」と。(『韓非子』内儲説上)

計然は葵丘、僕上の人、姓は辛氏、字は文子。(『史記』貨殖列傳　裴駰所引『范子』)

今、墨子書を按ずるに文子あり。文子は即ち子夏の弟子にして墨子に問ふ。(『史記』孟子荀卿列傳 裴駰所引『別録』)

等々、文子なる人物の記述はあるが、『文子』との関係は不明であり、成立の詳細な事柄については、全く認識の外側にある。この九巻本に対して『隋書』經籍志には、「『文子』十二巻 ― 文子は老子の弟子。『七略』に九篇あり。梁の『七録』に十巻あり。亡ぶ」との記述があり、後漢期から隋唐期にかけて少くとも二回は他者の操作が加わっていることは明らかである。宋の杜道堅撰『文子纘義』自序には「(北魏の)李暹の注せし所は乃ち十二篇。疑ふらくは、其の間に附託無きあたはず」とあり、南北朝期には、巻数の異なる二種類のテキストが南北に并存している。

また、『文子』書を評した記述としては、

老子・文子、天地に似たる者なり。(『論衡』自然篇)

文子・莊子・關令尹喜の徒に至りては、其れ文筆を屬りて、黄老を祖述し、玄虚を憲章すと雖も、但だ其の大旨を演ずるのみにして、永に至言なし。(『抱朴子』内篇釋滯)

情辨にして以て澤なるは、文子其の能を壇にす。(『文心雕龍』諸子)

等々がある。これらの記述及び河北省定県西漢墓竹簡などを合わせ考えると、その評価は様々であるが、『文子』が後漢期から魏晋南北朝期にかけて読まれ続けていたことは明らかである。そして特に、『文選』李善註に始まり、唐宋期の類書『太平御覧』、『藝文類聚』、『初學記』等々には、頻繁に引用されている③。李善は、西晋の張湛註『文子』を『文選』に於て註として引用していることから、恐らくは二種類のテキストを見ることができたのであろう。とすれば、十巻本と十二巻本は、さほど内容に差違はないものと考えて大過あるまい。したがって当面の間、『文子』研究は現行の十二巻本にのみ及ぼされるべきであり、遡るとしても十巻本までを限度とすべきであろう。(九巻本に関しては、最古の河北省定県西漢墓竹簡すら何巻本であるのか不明である現状に於ては、考証を及ぼすことは極めて困難である。本稿は最も読まれた十二巻本を考証の対象とするものである)

さて、この現行本『文子』は、文章の大部分が『淮南子』と重複しており、このことを十分に利用した研究が最も堅実なものとなろう。つまり現行本『文子』と『淮南子』とを逐一対照して、文字の異同、文章構造の相違、応韻の有無等々を詳細に考証し、それを基盤とすれば、他の様々なアプローチが生きてくるものと思われる。

しかしながら、『淮南子』の記録を見ると『漢書』藝文志には『淮南内』二十一篇と『淮南外』三十三篇の二種の

記述があり、また『隋書』經籍志には高誘及び許愼の両註の記述が、そして『文選』長楊賦李善註には應劭註『淮南子』の引用がある。したがって、現行本「淮南子」は『淮南内』であり、高誘・許愼の両註が駁して成立しているという定説はあるが、『淮南外』應劭註が已に佚しているだけに、対照の際には細心の注意が必要である。

そこで以上の如き文献学的諸問題を内包する『文子』に対して、本稿では、両書の『老子』引用を抽出し、その解釈の異同を明らかにすることによって、「老子の弟子」とされ、「老子・文子、天地に似たる者なり」と評された『文子』の思想上の基本的立場を考えるとともに、文献学的方面についても若干の考証を加えてみたい。

二　第Ⅰ類

まず第Ⅰ類であるが、これは『文子』と『淮南子』の『老子』引用の導入部が一致しているもので、著るしくそれを示す例が『文子』内に十四ヶ所見える。

	『文子』	篇名	章数	『淮南子』	篇名
1	〃	精誠	3	〃	覽冥
2	〃	〃	10	〃	道應
3	〃	〃	14	〃	本經
4	〃	符言	21	〃	道應
5	〃	道德	19	〃	〃
6	〃	微明	1	〃	〃
7	〃	〃	3	〃	〃
8	〃	〃	4	〃	〃
9	〃	〃	19	〃	〃

10	〃	下徳	3	〃	〃	〃	〃
11	〃	〃	6	〃	〃	〃	〃
12	〃	上仁	4	〃	〃	〃	〃
13	〃	〃	5	〃	〃	〃	〃
14	〃	上禮	8	〃	〃	〃	〃

（本来『文子』には章区分はないのであるが、考証を進める上での便宜上、「老子曰」、「文子問」などの型で一章が始まるものとして区分した）

右の十四例から、次に二、三例示してみる。（以下に示す『淮南子』の文章にほどこした。印は『文子』と重複している部分であることを示す。―本稿第三章に於ける引用についても同様である）

○『淮南子』道應訓

白公勝慮亂。罷朝而立、倒杖策鐓上貫頤。血流至地而弗知也。鄭人聞之曰、「頤之忘。將何不忘哉」此言精神之越於外、智慮之蕩於内、則不能漏理其形也。是故神之所用者遠、則所遺者近也。故老子曰、「不出戸以知天下。不窺牖以見天道。其出彌遠、其知彌少」

○『文子』精誠篇十章

老子曰、精神越於外、智慮蕩於内者、不能治形。神之所用者遠、則近遺者近。故、「不出於戸以知天下。不窺於牖以知天道。其出彌遠、其知彌少」此言精誠發於内、神氣動於天也。

これは『韓非子』喩老篇④や『列子』説符篇⑤に見える白公勝の説話を引いた後、寸評を述べ、『老子』四十七章を引用している『淮南子』の文章の後半部分と『文子』の文章が一致している例である。

○『淮南子』道應訓

田駢以道術説齊王。王應之曰、「寡人所有齊國也。道術難以除患。願聞國之政」田駢對曰、「臣之言、無政而可

以爲政。譬之若林木無材。而可以爲材。願王察其所謂、而自取齊國之政焉已。雖無除其患害、天地之間、六合之內、可陶冶而變化也。齊國之政、何足問哉」此老聃之所謂「無狀之狀、無物之象」者也。若王之所問者齊也。田駢所稱者材也。材不及林、林不及雨、雨不及陰陽、陰陽不及和、和不及道。

○『文子』微明篇第四章

老子曰、道無正而可以爲正。譬若山林而可以爲材。材不及山林、山林不及雲雨、雲雨不及陰陽、陰陽不及和、和不及道。道者所謂、「無狀之狀、無物之象」也。無達其意、天地之間、可陶冶而變化也。

この部分は『呂氏春秋』審分覽執一篇⑥に見える田駢と齊王の説話と『老子』十四章を引用している『淮南子』の文章から、田駢の言と老子の言とが整理されて成立している『文子』の文章の例である。

○『淮南子』道應訓

中山公子牟、謂詹子曰、「身處江海之上、心在魏闕之下。爲之柰何」詹子曰、「重生、重生則輕利」中山公子牟曰、「雖知之、猶不能自勝」詹子曰、「不能自勝、則從之。從之神無怨乎。不能自勝、而强弗從者、此之謂重傷。重傷之人、無壽類矣」故老子曰、「知和曰常、知常曰明、益生曰祥、心使氣曰强。是故用其光、復歸其明也」

○『文子』下德篇三章

老子曰、身處江海之上、心在魏闕之下、即重生。重生即輕利矣。猶不能自勝、即從之、神無所害也。不能自勝、而强不從。是謂重傷。重傷之人、無壽類矣。故曰、「知和曰常、知常曰明、益生曰祥、心使氣曰强。是謂玄同。用其光、復歸其明。

これは『呂氏春秋』開春論審爲篇⑦や『莊子』讓王篇⑧に見える中山公子牟と詹子の説話と、『老子』五十五章の引用からなる『淮南子』の文章から、具体的人名を削除して『文子』の文章ができている例である。

以上三例のみ示したが、のこり十一例もほぼ同じ形式、つまり次の二点をふむものである。

(1) 『淮南子』の説話形式が、『文子』では論説形式になっている。

(2) 『文子』は『淮南子』の示す具体的人名をすべて削除し、老子の言として整理している。

このことを文献学的方面から見ると、

(1) 『漢書』巻四十四淮南王劉安傳によると、『淮南子』は劉安が招致した数千人の賓客方術の士の手によるものとある。事の真偽は別として、いずれにせよ『淮南子』が『呂氏春秋』や『荘子』、『列子』、『韓非子』、『左伝』等々に現在収められている説話を引用できたのも、国家的スケールの援助に依ったればこそと考えられる。それに対して、少くとも大規模な編纂作業に依ったという記録のない、恐らくは個人の手に依るものであろう『文子』に、『淮南子』と同じだけの膨大な資料を集めることは不可能と思われる。(少くとも『淮南子』成立以前にはあり得まい)

(2) この第Ⅰ類十四例のみを見ると、他の典籍の説話をこのような文子型論説形式に改変した後、再びそれを『淮南子』に於て、もとの説話形式にもどすというような作業がなされたとは考えにくい。

という理由から、少くともこの十四例に関しては『文子』が『淮南子』を踏襲したと判断しても大過あるまい。

しかしながら、思想的観点からすれば、説話を通して『老子』の理解を求める『淮南子』と、伝える内容は同じながら、説話という形式をとらずに論説形式をとって『老子』理解を求める『文子』との間には、明らかなる編纂意図の相違をうかがい知ることができよう。

三　第Ⅱ類

第Ⅱ類は、『文子』、『淮南子』両書の『老子』引用の導入部が異なっているもの、もしくは伝える内容に相違が生じているものである。以下に四つほど例示してみる。

○『淮南子』道應訓

王壽負書、而行見徐馬於周。徐馮曰、「事者應變而動、變生於時。故知時者、無常行。書者言之所出也。言出於知者。知者藏書」於是王壽乃焚書而舞之。故老子曰、「多言數窮、不如守中」

○『文子』道原篇六章

老子曰、夫事生者、應變而動、變生於時。知時者。無常之行。故道可道非常道、名可名非常名。書者言之所生也。言出於智。智者不知非常道也。名可名非藏書者也。多聞數窮、不如守中。絶學無憂、絶聖棄智、民利百倍。人生而静、天之性也。感物而動、性之欲也。物至而應、智之動也。智與物接、而好憎生焉。好憎成形、而智出於外。不能反己、而天理滅矣。是故聖人不以人易天。外與物化、而内不失情。故通於道者、反於清靜。究於物者、終於無爲、以恬養智、以漠合神、即乎無門。循天者、與道遊也。隨人者與俗交也。故聖人不以事滑天、不以欲亂情。不謀而當、不言而信、不慮而得、不爲而成。是以處上而民不重、居前而人不害。天下歸之。姦邪畏之、以其無争於萬物也。故莫敢與之争。

これは、引用した『淮南子』道應訓の中に、『老子』一章「道の道ふ可きは、常の道にあらず。名の名づく可きは、常の名にあらず」を挿入に、さらに「書は言の出づる所なり。言は知者より出づ。知者は書を藏せず⑨」の部分を「書は言の生ずる所なり。言は智より出づ。智者は常道にあらざるを知らざるなり。名の名づく可きは、書を藏する者にあらざるなり。（書物は言語化 ― 時間の流れに従って変化する事物を固定化する働き ― することによって生まれるものであり、その言語は知識から生じるものである。それなのに、智者は書物に書いてあることが普遍的な道ではない、ということに気づいていない。言語として固定化できるようなものは、書として藏するに足りないのである）」と改変している。両書を比較してみると、『淮南子』の方の王壽と徐馮の説話⑩は『老子』五章「多言すれば數しば窮す、中を守るにしかず」の導入となっているのに対し、『文子』の方は『老子』一章「道の道ふ可きは……」の導入となっている。そして『老子』五章「多聞すれば數しば窮す、中を守るにしかず」、二十章「学を絶てば憂ひなし」、十九章「聖を絶ち智を棄つれば、民利百倍す」と引用を続け、後半部（全文『淮南子』原道訓と重複する⑪）へと論を展開する橋渡し的役割を持たせている。

○『淮南子』氾論訓

古者有鑿而總領、以王天下者矣。其德生而不辱、予而不奪。天下不非其服、同懐其德。當此之時、陰陽和平、風雨時節、萬物蕃息。鳥鵲之巢、可俯而探也。禽獸可羈而從也。豈必褒衣博帶、句襟委章甫哉。― 中略 ― 爲鷙禽猛獸之害傷人、而無以禁御也。而作爲之鑄金鍛鐵、以爲兵刃、猛獸不能爲害。故民迫其難、則求其便、困其患、則造

其備。人各以其所知、去其所害、就其所利。常故不可循、器械不可因也。則先王之法度、有移易者矣。—中略—故五帝異道、而德覆天下。三王殊事、而名施後世。此皆因時變、而制禮樂者。譬猶師曠之施瑟柱也。所推移上下者、無寸尺之度、而靡不中音。故通於禮樂之情者能作。音有本主於中、而以知樂器之所周者也。—中略— 先王之制、不宜則廢之。末世之事、善則著之。是故禮樂未始有常也。故聖人制禮樂、而不制於禮樂、治國有常、而利民爲本。政教有經、而令行爲上。苟利於民、不必法古。苟周於事、不必循舊。—中略— 故聖人法與時變、禮與俗化。衣服器械、各便其用。法度制令、各因其宜。故變古未可非、而循俗未足多也。—中略— 夫道其缺也、不若道其全也。誦先王之詩書、不若聞得其言。聞得其言、不若得其所以言。得其所以言者、言弗能言也。故道可道者非常道也。—中略— 故聖人所由曰道、所爲曰事。道猶金石一調不更。事猶琴瑟每絃改調。故法制禮義者、治人之具也。而非所以爲治也。

（この『淮南子』の文章に於ける。印は『文子』上禮篇二章に引用されていることを、また△印は『文子』上義篇四章に引用されていることを示す）

○『文子』上義篇四章

老子曰、治國有常、而利民爲本。政教有道、而令行爲古。苟利於民、不必法古。苟周於事、不必循俗。故聖人、法與時變、禮與俗化。衣服器械、各便其用。法度制令、各因其宜。故變古未可非、而循俗未足多也。誦先王之書、不若聞其言。聞其言、不若得其所以言。得其所以言者、言不能言也。故道可道非常道也。名可名非常名也。故聖人所由曰道。猶金石也。一調不可更事。猶琴瑟也。曲終改調、法制禮樂者、治之具也。非所以爲治也。故曲士不可與論至道者、訊寤於俗、而束於教也。

○『文子』上禮篇二章

老子曰、古者被髮而無卷領、以王天下。其德生而不殺、與而不奪。天下非其服、同懷其德。當此之時、陰陽和平、萬物蕃息。飛鳥之巢、可俯而探也。走獸可係而從也。及其衰也、鳥獸蟲蛇、皆爲民害。故鑄鐵鍛刃、以禦其難。故民迫其難、則求其便。因其患、則操其備。各以其智、去其所害、就其所利。常故不可循、器械不可因。故先王之法度、有變易者也。故曰、「名可名非常名也」五帝異道、而德覆天下。三王殊事、而名後世。因時而變者也。譬猶師曠

之調五音也。所推移上下、無常尺寸、以度而靡不中者。故通於樂之情者能作。音有本主於中、而知規矩鉤繩之所用者、能治人。故先王之制、不宜即廢之。末世之事、善即著之。故聖人之制禮樂者、不制於禮樂。制物者、不制於物。制法者、不制於法。故曰、「道可道非常道也」

『文子』が『淮南子』の各訓に分散した主題を集約して、ひとつのまとまりある文章を形成している例は頻繁にあるが、この部分はその逆のケースである。『淮南子』氾論訓冒頭の部分が、『文子』の上義篇四章と上禮篇二章に二分されている。この部分に関して言えば、上義篇四章は普遍的治国の常道（原理）について、上禮篇二章は変動的禮樂法度について述べていることから、『老子』引用の導入としては根本的に異なっていることになり、決して不自然な分割とは言えまい。

次の文章は『淮南子』に依りながら作為的に『老子』の文章をかえたものである。

○『淮南子』齊俗訓

古者民童蒙、不知東西、貌不羨乎情、而言不溢乎行。其衣致煖而無文、其兵戈銖而無刃。其歌樂而無轉、其哭哀而無聲。鑿井而飲、耕田而食、無所施其美、亦不求得。親戚不相毀譽、朋友不相怨德。乃至禮義之生、貨財之貴、而詐偽萌興。非譽相紛、怨德並行。於是乃有曾參・孝己之美、而生盜跖・莊蹻之邪。故有大路龍旂、羽蓋垂緌、結駟連騎、則必有穿窬拊楗、抽箕踰備之姦。有詭文繁繡、弱綈羅紈、必有菅屨跂踦、短褐不完者。故高下之相傾也、短脩之相形也、亦明矣。――中略――由此觀之、廉有所在、而不可公行也。故行齊於俗可隨也。事周於能易爲也。矜偽以惑世、伉行以違衆、聖人不以爲民俗。

○『文子』道原篇十章

老子曰、――中略――古者、民童蒙不知東西。貌不離情、言不出行。行出無容、言而不文、其衣煖而無采、其兵鈍而無刃。行蹟蹟、視瞑瞑。鑿井而飲、耕田而食、不布施、不求德。高下不相傾、長短不相形。風齊於俗可隨也。事周於能易爲也。矜偽以惑世、畸行以迷衆。聖人不以爲世俗。

この部分、『淮南子』の方は「古は、民童蒙にして東西を知らず」という導入より始まり、古は人為的なさかしら

なく生活していたが、現在は礼義が生まれ、財貨を貴ぶようになり、人々の間には、高下・長短の差が生じるようになった、という論の展開である。ところが『文子』の方は、古は人々は東も西も知らないほど無知で、そこに人為的なさかしらは全くなかった。だから高下・長短の差が生じることもなかった、という論の展開になっている。しかしながら、両書の『老子』解釈は同一である。

○『淮南子』齊俗訓

天下是非無所定。世各是其所是、而非其所非。所謂是與非各異、皆自是而非人。由此觀之、事有合於己者、而未始有是也。有忤於心者、而未始有非也。故求是者、非求道理也。求合於己者也。去非者、非批邪施也。去忤於心者也。忤於我、未必不合於人也。合於我、未必不非於俗也。至是之是無非、至非之非無是。此眞是非也。若夫是於此、而非於彼、非於此、而是於彼者、此之謂一是一非也。此一是非隅曲也。夫一是非宇宙也。今吾欲擇是而居之、擇非而去之。不知世之所謂是非者、不知孰是孰非。老子曰、「治大國若烹小鮮」爲寛裕者、曰勿數撓。爲刻削者、曰致其鹹酸而已矣。――中略――故趣舍合、即言忠而益親、身疏即謀當而見疑。――中略――今吾雖欲正身而待物、庸遽知世之所自窺我者乎。若轉化而與世競走、譬猶逃雨也。無之而不濡、常欲在於虛、則有不能爲虛矣。若夫不爲虛而自虛者、此所慕而不能致也。故通於道者、如車軸不運於己、而與轂致千里、轉無窺之原也。不通於道者、若迷惑。告以東西南北、所居聆聆、一曲而辟、然忽不得。復迷惑也。故終身隷於人、辟若倪之見風也。無須臾之間定矣。故聖人體道反性、不化以待化、則幾於免矣。

○『文子』道德篇十八章

老子曰、天下是非無所定。世各是其所善、而非其所惡。夫求是者、非求道理也。求合於己者也。非去邪也。去迕於心者、今吾欲擇是、而居之。擇非而去之。不知世所謂是非也。故治大國、若烹小鮮。勿撓而已。夫趣合者、即言中而益親、身疎而謀當即見疑。今吾欲正身而待物、何知世之所從規我者乎。吾若與俗遽走、猶逃雨。無之而不濡。欲在於虛、則不能虛。若夫不爲虛、而自虛者、此所欲而無不致也。故通於道者、如車軸不運於己、而與轂致于千里、轉於無窮之原也。故聖人體道反至、不化以待化、動而無爲。

両書の記述を比較考証してみると、『淮南子』の方では『老子』六十章の「大國を治むるは、小鮮を烹るがごとし」の語に対して、「寛裕を爲す者は、數しば撓すことなかれと曰ひ、刻削を爲す者は、其の鹹酸を致すと曰ふのみ」と言い、以下に「自りて見る所の異なればなり」と続けて、事物の本来的在り方はひとつであるにもかかわらず、様々な見方にまどわされ本質を見抜けないでいる一般の人間を批判し、聖人は「道を体として性に反り、化せずして以て化するを待つ。則ち免るるに幾し」と結んでいる。それに対して『文子』の方は『老子』六十章引用に続いて「撓すことなかるのみ」とだけ述べ、『老子』引用部分を『淮南子』の如く単なる相対的立場からの一見解として示すのではなくて本義のままに解釈している。したがって、この部分に関して言えば、『老子』解説書としての『文子』の特色が全面に押し出されていることになる。もちろん、この部分についても他の部分と同様、『淮南子』の文章から固有名詞を削除し、その説話的要素を取りのぞいたことに変わりはないのであるが、『文子』独自の思想が展開している、という点に於ては十分に注意すべきであろう。

以上、いくつかの特殊例を通じて言えることは、『文子』が『淮南子』よりも忠実に『老子』を敷衍する『老子』解釈書であることである。（したがって、『文子』・『淮南子』両書は大いに重複するとはいっても、ともに個性豊かな『老子』解釈書とエンサイクロペディアであると言えよう）また『淮南子』との重複に様々な問題がありながらも、文章に一貫性があり、より流暢な文体になっているということである。これは後世『淮南子』に加えられた校訂が、すでに『文子』に於ては施されているということからも明らかであり、そういう点から考えると『文子』なる書は、『淮南子』と『老子』を自由自在に操っており、現行本『文子』の著者（少くとも本稿に於て示した、『淮南子』と重複する部分）は、相当に『老子』及び『淮南子』に精通していた者ではなかったかと思われる。

四　第Ⅲ類

最後に第Ⅲ類、『淮南子』と重複しない所謂『文子』独自の文章に於ける『老子』引用をめぐって、『文子』の基

本的性格について改めて考えてみたい。

○『文子』道原篇十章

老子曰、――中略――夫無形大。有形細。無形多。有形少。無形强。有形弱。無形實。有形虛。有形者遂事也。無形者作始也。遂事者成器也。作始者樸也。有形則有聲。無形則無聲。有形産於無形。故無形者有形之始也。廣厚有名。有名者貴全也。儉薄無名。無名者賤輕也。殷富有名。有名者尊寵也。貧寡無名。無名者卑辱也。雄牡有名。有名者章明也。雌牝無名。無名者隱約也。有餘者有名。有名者高賢也。不足者無名。無名者任下也。有功即有名。無功即無名。有名産於無名。無名者有名之母也。夫道有無相生也。難易相成也。是以聖人、執道虛静微妙、以成其德。故有道即有德。有德即有功。有功即有名。有名即復歸於道。功名長久、終身無咎。王公有功名。孤寡無功名。故曰、「聖人自謂孤寡」歸其根本。功成而不有。故有功以爲利、無名以爲用。――以下略――

（本章の引用中に附した。印は『老子』の引用であることを、また△印は『老子』の語に基づいていると思われる語であることをそれぞれ示している）

この部分は随所に『老子』からの引用、或は『老子』に基づく言を交えながら、有形・無形論（『老子』的な逆説表現をとっている）から有名・無名論へと移り、聖人の在り方のひとつである「孤寡」に言及している。

○『文子』精誠篇十三章

老子曰、大道無爲。無爲即無有、無有者不居也。不居者即處而無形。無形者不動。不動者無言也。無言者即静而無聲。無形者視之不見、無聲者聽之不聞。是謂微妙。是謂至神。綿綿若存。是謂天地之根。道無形無聲。故聖人强爲之形以一字爲名。天地之道、大以小爲本、多以少爲始。天子以天地爲品、以萬物爲資。功德至大、勢名至貴、二德之美、與天地配。故不可不軌、大道以爲天下母。

先に示した例と同様、随所に『老子』の引用を交えながら、道に関する在在的議論を展開している。

○『文子』上仁篇十二章

老子曰、―中略― 古之善爲天下者、無爲而無不爲也。故爲天下有容。能得其容、無爲而有功。不得其容、動作必凶。爲天下有容者、豫兮其若冬涉大川、猶兮其若畏四鄰、儼兮其若客、渙兮其若冰之液、敦兮其若樸、混兮其若濁、廣兮其若谷。此爲天下容。豫兮其若冬涉大川者、不敢行也。猶兮其若畏四鄰者、恐自傷也。儼兮其若客者、謙恭敬也。渙兮其若冰之液者、不敢積藏也。敦兮其若樸者、不敢廉成也。混兮其若濁者、不敢明清也。廣兮其若谷者、不敢盛盈也。進不敢行者、退不敢先也。恐自傷者、守柔弱不敢矜也。謙恭敬者、自卑下尊敬人也。不敢積藏者、自損弊不敢堅也。不敢廉成者、自虧缺不敢全也。不敢清明者、處濁辱而不敢新鮮也。不敢盛盈者、見不足而不敢自賢也。夫道退故能先、守柔弱故能矜、自卑下故能高人、自損弊故實堅、自虧缺故盛全、處濁辱故新鮮、見不足故能賢道。無爲而無不爲也。

この部分は『老子』三十七章及び四十八章に見える「無爲にして爲さざるなし」を文の冒頭と末尾の二ヶ所に配置し、中ほどに『老子』十五章と、その解説を述べて無爲論を展開している。

ここに挙げた三つの文章を見ると、第Ⅰ類及び第Ⅱ類で示した『文子』の例文と同様、堅実に『老子』を解釈し、敷衍するものであると言えよう。とすれば、全篇にわたって『老子』を引用する『文子』なる書に一貫するものとして最も顕著なるものは、決して『老子』から甚だしく逸脱することのない、その忠実な『老子』解釈書たらんとする姿勢である。

五 おわりに

以上、『老子』引用をめぐって『文子』について考えてきたが、最後に現行本『文子』に関して若干の私観を述べてみたい。

まず、その成立(12)に関してであるが、『文物』が示す所の二、三の例文によると、各章の冒頭部は「老子曰……」は「文子曰……」と、「文子問曰……、老子曰……」は「平王曰……、文子曰……」と竹簡に於ては記述されており、

基本的な内容は同じながら、その他表面上の異同は多々あるらしい。この事実から推せば、『文子』は老荘思想が盛んであった魏晋期に、一度は大きく変革したと見るのが妥当であろうし、それを巻数の推移と結びつけることも可能である。したがって現存する資料をもってすれば、後漢期に於て現行本と相似した型の『文子』が已に存在し、現行本のスタイルが成立したのは魏晋期であると考えるのが妥当であろう。

そして、『文子』の説話を論説形式に改め、過去の賢人の言をすべて老子の言として整理しているという内容から推せば、現行本は魏晋南北朝には清談の場に於て『文子』の『老子』解釈から説話を思い浮かべるといった型で読まれた所の基本的な『老子』解釈書、或は入門書、もしくは余興の書、酔狂の書であったのではないか。

このようにして見ると、『文子』の成立及びその編纂意図については甚だ不可解な点が多く、その淵源をさぐっていくには河北省定県西漢墓竹簡などに基づく更に詳細な考証が必要であろう。以上、本稿に於ては、極めて基本的な『文子』の在り方を述べたが、今後様々な資料に基づき、各篇各章の思想内容について、個別的に考証していきたい。

註

① 帛書『道原』、『經法』、『十大経』などと『文子』のかかわりを唐蘭氏が『马王堆汉墓帛书「經法」――马王堆出土《老子》乙本卷前古佚书的研究』の中で述べている。

② 河北省定県西漢墓竹簡に関しては、『文物』一九八一年第八期に掲載されている。ただし『文子』竹簡については、六章出土し、現行本と相同するとのみ示してあり、その具体的内容は未だ公開されていない。この竹簡を対象とした研究は、今後の課題として保留しておきたい。また、この竹簡に基づいて熊鉄基氏が『秦漢新道家略論稿』(上海人民出版社)の中で「対『文子』的初歩探討」という論文を発表している。

③ しかしながら、これらの書には現行本には見られない文章の引用もあり、隋唐期に於ても尚、『文子』の内容に変動があったのではないかと思わせる資料となっている。

④ 『韓非子』喩老篇「白公勝慮亂、罷朝、倒杖而策鋭貫頤、血流至於地而不知。鄭人聞之曰、『頤之忘、將何爲

忘哉』故曰、『其出彌遠者、其智彌少』此言智周乎遠、則所遺在近也。是以聖人無常行也」

⑤ 『列子』説符篇「白公勝慮亂、罷朝而立、倒杖策鋏上貫頤、血流至地、而弗知也。鄭人聞之曰、『頤之忘、將何不忘哉』意之所属著。其行足躓株埳。頭抵植木、而不自知也」

⑥ 『呂氏春秋』審分覧執一篇「田駢以道術説齊。齊王應之曰、『寡人所有者齊國也。願聞齊國之政』田駢對曰、『臣之言、無政而可以得政。譬之若林木、無材而可以得材。願王之自取齊國之政也』駢猶淺言之也。博言之、豈獨齊國之政哉。變化應求、而皆有章。因性任物、而莫不宜當。」

⑦ 『呂氏春秋』開春論審爲篇「中山公子牟謂詹子曰、『身在江海之上、心居乎魏闕之下。奈何』詹子曰、『重生、重生則輕利』中山公子牟曰、『雖知之、猶不能自勝也』詹子曰、『不能自勝則縱之。神無悪乎。不能自勝而强不縱者。此之謂重傷。重傷之人、無壽類矣』」

⑧ 『莊子』讓王篇「中山公子牟謂瞻子曰、『身在江海之上、心居乎魏闕之下。奈何』瞻子曰、『重生、重生則利輕』中山公子牟曰、『雖知之、未能自勝也』瞻子曰、『不能自勝則從。神無悪乎。不能自勝而强不從者。此之謂重傷。重傷之人、無壽類矣』」

⑨ 王念孫は『読書雜志』に於て「知者は書を藏す」に「不」字を補っている。それに從った。

⑩ 『韓非子』喩老篇「王壽負書而行、見徐馮於周塗。馮曰、『事者爲也。爲生於時、知者無常事。書者言也。言生於知、知者不藏書。今子何獨負之而行』於是王壽因焚其書而儛之。故知者不以言談教、而慧者不以藏書篋。此世之所過也。而王壽復之、是學不學也。故曰、『學不學、復歸衆人之所過也』」

⑪ 『淮南子』原道訓「夫鏡水之與形接也。不設智故、而方圓曲直、弗能逃也。是故響不肆應、而景不一設。叫呼仿佛默然自得。人生而靜、天之性也。感而後動、性之害也。物至而神應、知之動也。知與物接、而好憎生焉。好憎成形、而知誘於外不能反已而。天理滅矣。故達於道者、不以人易天。外與物化、而內不失其情。至無而供其求時騁、而要其宿。小大脩短、各有其具。萬物之至、騰踴肴亂、而不失其數。是以處上、而民弗重。居前而衆弗害。天下歸之、姦邪畏之、以其無爭於萬物也。故莫敢與之爭。―中略―是故達於道者、反於清淨。究於物者、終於無爲。以恬養性、以漠處神、則入于天門。所謂天者、純粹樸素、質直皓白、未始有與雜糅者也。所謂人者、偶睦智故、曲巧僞詐、所以俛仰於世人、而與俗交者也。故牛岐號戴角、馬被髦而全足者、天也。絡馬之口、穿牛之鼻

者、人也。循天者、與道游者也。隨人者、與俗交者也。夫井魚不可與語大拘於隘也。夏蟲不可與語寒篤於時也。曲士不可與語至道拘於俗束於教也。故聖人不以人滑天、不以欲亂情。不謀而當、不言而信、不慮而得。不爲而成。精通于靈府、與造化者爲人」

⑫ 成立に関して熊鉄基氏は戦国末年から漢初に至って盛んであった黄老学の一派（新道家）の手によるものであろうと指摘しているが、この提言についても、まだ検討の余地があろう。

（使用版本）

『文子』守山閣叢書本

『淮南子』浙江書局二十二子本